興福寺大鏡

南都七大寺大鏡　第一集
興福寺大鏡　冊

南都七大寺大鏡第四集　興福寺大鏡第二册解說

第一—第三　北圓堂　外觀、內部內陣天井　內部外陣構架、

（八角圓堂、單層、本瓦葺石口より露盤絕頂まで四丈九尺、外陣一面一丈六尺二寸、內陣一面六尺三寸八分、土壇高四尺九寸）

養老五年元正天皇と太上元明天皇とは同じく右大臣從二位長房王に勅して贈太政大臣正一位藤原不比等の爲めにその周忌八月三日に興福寺內に圓堂院を造らしめ給ふ。これ北圓堂院の草創であつて、弘仁四年同じく本寺に成つた圓堂院に對して爾後北圓堂院と呼ぶ。さうして本寺の古記によれば、院は彌勒三尊を本尊とする圓堂一基と他に一堂を有し、これに各廡廊を附して本寺の一劃を成して居たのである。

この本堂院はその建立後本寺に災した元慶二、寛仁元、永承元年の火にはよくその厄を免かれたが、永承四年二月十八日の火に終に建立約三百四十年にして灰燼となる。その後長く再興のことを見なかつたが、四十餘年にして權大僧都賴尊別當たるの時、漸くにその機を得、寛治六年正月十九日その供養は關白師實右大臣師通等藤家一門の參會の內に行はれ、圓堂その舊觀を復したのであつた。とは言へこの新堂はその命を保つこと僅か四年、永長元年九月廿五日興福寺の大火に烏有に歸す。後十二年を經て天仁元年七月五日藤原忠實關白たるの時、三度造立供養、更に七十二年の後、治承四年十二月二十八日東大興福二寺平氏の兵火に襲はれることあると本堂亦燒失の災を見る。後ほゞ三十年を經、家實攝政の時、承元二年寺家の沙汰として四度建立のことゝなる。現存の北圓堂は即ちこの時のものであつて、其後七百餘年間、本寺數度の火災に堂塔次第に廢滅する內に獨りよくこれを免かれ得て、本寺最古の建築として存へるものである。

大體上述のやうな興廢の歷史を有つ北圓堂院は今圓堂のみを遺こす。今こゝに本堂院建立最初の結構を想ふのに、それはほゞ法隆寺東院伽藍の現在のものゝ如うに、圓堂を中とし四圍に廡廊を廻らし、これに一堂を附して居たのであつて、その事實は諸寺緣起集中に採錄する興福寺緣起が永承最初の回祿以前の本堂の詳細を語ることによつて明らかになるものである。それはなほ南圓堂建立以前の記錄であるが故にたゞ圓堂院と呼ばれ、

一圓堂院　圓堂一基（八角方別一丈七尺。瓦端幷大小垂木及高欄等用裁金銅餝。）　廡廊一條（東西各長十四丈七尺。北長十五丈。南門左右各六丈二尺。幷廣一丈一尺在門六口。）　堂一基（長八丈廣四丈四尺。大垂木用裁金銅餝。）　廡廊一條（西長十九丈七尺。北長四丈幷廣一丈一尺在門二口。）

と記される。堂一基の位置はこの圓堂廡廊の何れの方に考ふるべきか、その記述やゝ漠としてゐる。又この堂と廡廊とがその姿を最後に地上に失つたのは何時の火災によつたものであるかも今これを詳らかにし得ないのである。

今北圓堂に就いてのこの記述と、圓堂としては最古の遺物であり、最初の北圓堂とはその建立の時を二十年とは相距てゝ居ない法隆寺夢殿の實際とを比照して現在の北圓堂を觀るのに、我々はそこに同一と相異とを見出し、やゝ最初のものを想ひ、現在のものゝ特點を

見出し得るであらう。即ち、本堂は現在石材によつて構へられる八角形一重の土壇上に建ち、四方に石階を有つて居る。これを夢殿に於て見るのに、壇は同じく東西南北四方に石階ある八角形のもの乍ら、これを二重に作り、上壇には勾欄を着け繞らす。惟ふに原夢殿もかくあつたのであらう。原北圓堂も亦勾欄を有つて居たことは前記の縁起文がこれを明らかにして居る。たゞ壇は二重のものであつたか否か、今遽かに決し得ない。たゞ思ふは、現在の石壇のまゝに勾欄を着ければ、それは軒先の直下となつて雨氣に打たれる憂があり、夢殿の勾欄は上段に着いてよく軒に保護せられ、その怖を絶つて居るのを以てすれば、或は本堂のものも二重、恰かも夢殿のそれの如うであつたのではなからうかと言ふことを、感ずるは夢殿のそれのよく上の軒を承け安らふ美しさをである。壇上八角の圓堂はその外部に於て八本の側柱によつて支へられる。その柱は八角圓堂の多くが八角形に作る例を破つて圓形である。その各邊は現在はその柱心間に於て一丈六尺二寸と言ひ、前記縁起には一丈七尺とする。即ちその規模は大體原時を傳へるのである。八面は石階を迎へる四面に扉を、他の四面に櫺子窓を設ける。夢殿の側その大體に於てまた同じである。鴨居の上軒までに於ては、組物は全く和樣三手先であり、軒廻りは小天井支輪の側によらず、通肘木を設け、中備には頭貫の上に三つ斗と斗束とを二重に用ひる。當代にその例稀なものである。夢殿に於ては三つ斗は一重、斗束はこれを使ふことなく、そこに簡潔の美が存し、我等の北圓堂に於てはその複雑の巧が莊重を生んで居る。軒は三重垂木、又一つの異例である。縁起文によれば原とは二重垂木である。承元建立の時、ある意樂からこの擧に出でたのであらう。このことより見れば、前述の圓柱や重複の三つ斗斗束の異圖も承元建立の時の改造であつて、惟ふのに鎌倉初期の建築界に起つたある活力を示すものではあるまいか。その地垂木はその斷面楕圓形を成して居る。これ等諸の木材はすべて丹塗りせられる。屋蓋は瓦葺八寶形、その頂には八角の露盤を設け、その角々に小寶珠を着ける。露盤の上には次第に覆鉢、圓形の寶餅、八稜形の承露盤、圓形の寶餅、四重瓣の蓮花を重ね、花は上に寶珠を承け、寶珠は四片の水煙板を着ける。皆銅造である。夢殿のものが寶珠には水煙に非ずして放射光を附け、承露盤には小寶珠を着ける外に寶鐸を垂らす樣、更にはその寶餅のよく餅形を保つあたり、その制やゝ奇古の趣に富むのに反して、北圓堂のものはその各部或は古式原意より離れた所はあるとしても、その承受の工合の彫琢せられ、その全體の形式美に於てはよほど増した點を有つて居る。この寶珠盤の下から屋稜が八方に流れる。流れる曲線を辿ればそれは夢殿のそれのやうな、又他の多くの建築のそれのやうな一つの凹曲線のものではなく、その中途に於てやゝ凸曲線を成し、人はこゝにもその莊重の氣と異例を見出す。

本堂の外觀に就いての考察はほゞ以上に止めて、我々は扉を排して堂内に入る。内部は側柱に並ぶ八本の圓柱によつて内外二陣に分たれる。圓堂の例である。外陣は上、化粧屋根裏を示し、三手先組物、中備三つ斗及斗束亦外觀軒廻りの如く通肘木頭貫の間を飾り、側柱の組物から内陣柱へは二條の虹梁を繋け、下、床は土間である。

內陣は外陣より一段高く須彌壇を設らへる。壇上には彌勒三尊を安置する。上を仰げば大斗の上、肘木二手に組んで天井を支へる。組物の內備は斗束一つを以てし、その間の壁に斗束を挾んで恰もか蟇又のやうな形に雲綱彩色を施こす。天井は格天井、中に天蓋を着ける。天蓋は八瓣の寶相華を中心として光線周圍に放つ。その光の內に日月現はれ、蓮瓣飛散し、八方には雲中供養樂器の附いた跡を遺こす。皆平たい木板によつて作られ彩色せられたものである。

我々は以上本建築を寧ろ部分的にその外部より觀て內部に入つたのであるが、今こゝにその大體を觀る爲めに、再び暫く堂を出、やゝ距てゝこれを眺めようではないか。

日本建築に於て、その大體に就いて言へば、塔と圓堂とは最も美しい二つである。前者に於て人は寧ろ空中に細く高く浮ぶ樣を天を想ふ故に喜び、その各階の屋蓋の間に生れる律調に美を感じるのである。後者は言はゞ寧ろ地のもの、人はまずその靜かに土に落ち着く樣に彼の心の安息を見出す。のみならずこれは、多くの他の建築物がその平面圖に於て四角形のものである爲に、やゝともするとその單調に人の心を倦かしめるのとは反して、その八角形なるに於てほゞ彫刻を見るかの感を與へ、繞れば圓堂はほゞ前背側面の隔てなく、人の立つ位置のまゝにその姿常に美しいプロポーションを執る。他のものに於て直ちに感ずるやうな實用觀も何時しか去つて人は藝術の境にさまよふ。理智に趣いては人はその平面圖の美しさをも思ひ、想に走つては人は圓堂幾度繞つても盡きない悠久の心を抱く。悠久の心は人を驅つて實體觀より離れしめる。この故に傳說から離れても法隆寺の圓堂は正しくも夢殿でなくてはならない。かう言へば人の思がやゝ散漫に流れるの謂ともならうか。しかし決してその憂はない。感じる心と悟る心とはやがて一つとなつて屋蓋の外輪線を辿る。それは八つの稜から聚つて絕頂に到つて寶珠露盤を見出し、そこにつの統一が成るのである。

今この考を抱きつゝ北圓堂を觀る。夢殿に於て見た寶珠屋蓋軒斗拱柱基壇石階の間のプロポーションの整美は北圓堂にはやゝこれを乏しくし、軒の出に對して柱礎から軒廻りまでの長さやゝ長く、基壇の軒の出を承ける安定やゝ少きに失するの憂がある。又彼に於てその全部に亘つて存して居る優美や簡潔やは、今此に於てはその屋蓋から垂木組物梁貫鴨居柱等の木割やその配置の工合に到るまですべて充分な莊重や複雜やとなつて居て、人はそこにやゝその純化に欠き粗雜に傾き乍らいかにも強い意志の働くのを想ふ。前に數へ擧げられた本建築細部に亘つての種々の異例もこゝに併せて考へられるべきものであり、それ等は相ともに平安朝末の文化の有つ便化習癖から免れて、人の知と情と意とをすべて新らしく搖がして事を構へ成さうと言ふ鎌倉時代初の精神の出現に外ならない。その精神をよく體驗し且つ充分の意圖あるその世のある建築家は、この形式上最も藝術的な圓堂と言ふ建築に於て、その內容の充分な表現を成したのである。他のやゝともすれば實用觀や實體觀の密接に伴着する建築に於てではなく、このやうな圓堂に於てそれが行はれたと言ふことは思へば故あるのである。養老の圓堂は想ふのにほゞ夢殿に近似したものであらう。そうしてそれは夢殿のやうに優麗に、言はゞ

寧ろ感情に生きた作品であつたらう。承元のそれは莊重に、言はゞ寧ろ意志によつて解釋せられた形式ではあるまいか。本堂はこのやうな問題を含みつゝ興福寺に、いや南都に、更には日本に立つ特殊な建築である。

第四—第六　北圓堂本尊木造彌勒佛坐像

三尊像、本尊像五面、同背面

彌勒像、全長四尺六寸、光背高七尺五寸、臺座高三尺五寸五分

諸寺緣起集採錄の興福寺緣起によれば、最初北圓堂の壇上に安置せられた諸佛像は、

彌勒佛像一軀　高三尺九寸　脇侍菩薩像二軀　各高三尺六寸五分

羅漢像二軀　各高五尺五寸　四大天王　各高五尺八寸

である。奈良朝に於ては法相宗の流行とともに彌勒佛の信仰厚く、從つてその造像のこと亦屢々行はれ、和銅四年の法隆寺塔本のその淨土像、養老六年の天武天皇の奉爲めの像、天平十年の石川年足の像、西大寺彌勒堂のその淨土像、當麻寺金堂の像等はその著明なものである。本寺に於てはことにその尊崇のこと厚く、本堂のものゝ外に同じく養老五年にその淨土像が造られて金堂に安置せられ、天平二年には五重塔本北面に同じくその淨土變が作られて居るのを見るものである。

本堂のこれ等の像は永承、永長、治承の本堂炎上の内に次第に與廢相次ぎ、現在の建築建立の際には、當時の關白藤原家實の沙汰として造立せられたのである。即承元二年十二月十七日にその諸佛の事始を行ひ、御衣木加持は法印權大僧都親覺により、佛師法印運慶これを造ると言ふ。時の記錄猪熊關白記は語つて御佛九體とし、擧げて

中尊一體　彌勒坐像半丈六　脇士二體　法苑林大妙相　坐像六尺

羅漢世親玄奘　立像六尺　四天各一體　立像六尺

と言ふ。現今北圓堂の內陣壇上には、二羅漢四天王諸像は他に移されてその姿を見ずたゞ彌勒三尊像のみを置く。三尊は共に木造金薄押の像、本尊彌勒菩薩像は、三尊の本尊となつた場合に已に奈良朝から屢々行はれた如うに、螺髮の如來形によつて現はされて居るものである。木眼、右手は屈臂、第一第二指を相捻し、左手は膝上に安め、第三第四指を各やゝ折つて說法の相にあり、八角の台座上に裾を垂れて結跏趺座する。光背には三顆の寶珠と八體の飛天とを透彫にする。台坐に懸かり垂れる裾と台座光背とは後補のものである。脇侍像は玉眼を入れ、一手は屈臂、第一第三第四指を捻し、他手は膝の上に安めその指は開く。本尊のものと同形式の八角座の上に一足は跏し、他足はこれより垂れる、二體はその台座とともに本尊の裾台座光背と同時、想ふのに足利時代に成つたものである。かくて承元の造立のものは本尊の佛體のみである。さうしてそれは運慶の作と言ふ。

我々は前册に於て今金堂に安置し、もと講堂の本尊であり、院尊の作であると考へられる阿彌陀像を觀て來た。今こゝには運慶作と言ふ彌勒像を見る。兩作者はほゞ同時に存らへ、彫刻界一つの氣運に乘り、一つの寺內にその技を振つたものであり乍ら、一はやゝ古式を守る者、他は新しい境地を開いて行かうとする者。その間にある相違はこの二像に於てどのやうに求め得るであらうか。我々はそ

れをやゝその詳細に亘つて見たならば我々の前にある彌勒像の一つの觀察はやゝその體を成すであらうと思ふ。

まづその頭部を觀る。阿彌陀像に於てはその螺髪部彌勒像よりもその面部の大きさと比べて遙か廣く、又その配列の樣も遙か細密である。又その額上の生へ際は阿彌陀像のものが直線的であるのに本像のはやゝ凹形を成す。目は前者のものがより凹形のもので、その眦はより長く切れ、よほど伏視の樣である。又鼻はよくその小鼻の形を現はして居る、さうしてこれ等の諸點に於て阿彌陀像のものはよほど形式的であり、彌勒像のそれはよほど實人的なものとなつて居る。衣は阿彌陀像のものがその下腹部をも露はして居るのに本像はこれを藏し、その胸邊の肉の取り方も相異る。衣の左胸部から下腹部を蓋ふあたりは、前者は遙かその衣紋を多くし、その線は後者のものゝやうに飜つて裏を見せることをしない。なほその他の部分に於ての衣紋のとり方も前者のものは後者のものより形式的であり、脹らみなく平たく身に着く趣を成す。又掌の形を見るのに前者のものはその下張りをより大きくして居る。さうしてこれ等の諸點に於て阿彌陀像は、これを法界寺や平等院の阿彌陀像と相比照すれば明らかになる如うに、定朝以來の形式の流を汲むものであり、我等の彌勒像はこの形式を打ち出て、寧ろそれ以前のものに依り、これにその新しい解釋を加へたものである。さうしてその二要素を相交へる際、舊要素は新要素に比して運慶に於て多く、快慶定慶等に於てこれを少くして居るものである上に、これ等鎌倉時代の作家がその特技を四天王力士夜叉形のものに於て現はすものであるに於ては、本像のやうな如來形像が古式に加へて居る所に乏しく、そこに以て強調せらるべき新味に缺けて居るのは又止むを得ないものである。

第七―第一三　西金堂木造金剛力士立像

吽形像　正面、頭部、左側面　阿形像　正面、右斜面、左斜面、背面

吽形像全長五尺三寸三分　阿形像　全長五尺三寸七分

興福寺西金堂金剛力士像は木造彩色のものである。眼には玉を嵌め、身には胡粉地に朱を塗つて肉色を現はし、裙には群青を主色とした輪寶唐草の丸文、雲文、唐草文を作り、その縁には金を押す。一體は右手に一體は右指と左足とに欠落を見る。岩座は古く、その下の洲濱座は後補のものである。　さうして大正四年本像修理の際に正應修補の體內銘が發見されて居る。その文に「西金堂奉修複二王施主合力之內　權少僧都英禪 緣願房大導師　呪師大法師專藝 慶印房　後見大法師覺毫 慶學房千時雜掌　等也　木大佛師善增 岩見公　繪大佛師 薩摩公　漆工寄人等六人 國貞、宗家、國光、宗弘、仲次郎、童子太郎　正應元年 戊子 九月十四日執筆僧信專 慶眞房」と言ふ。このことは早く興福寺濫觴記が記して居るのであつて、この修補は建治三年七月廿六日南都に地震があつて、本寺は爲めに火を出し、金堂講堂灰燼に歸した時、西金堂は幸に火災はこれを免かれたのであつたが震災はこれを被り、本像また破損のことあつたのによるものである。その何れの部分がこの時の修補に屬するものであるか、製作と修補と時を近くして居るから、今これを明らかにし得ない。たゞその震災によるものであり、又體內に修補記文のあることを以てすれば、解體が行はれたほどであり、又繪佛師の加入があるのを以てすれば、現存の彩色文樣にその入手の多かつたことはほゞ考へられる。

今その兩像を見るのに、一體は開口瞋眦、やゝ伏視して右手を垂れ張つて掌を外に向け開き、左手は屈臂後に張り揚げて拳を作す。腰を左に捩ぢ足を右に張り左足に重心を置く。衣は裾高く右に飜り靡く。一體は同じく瞋眦の様ではあるが、口は閉ぢて左方やゝ遠きを瞰む。屈臂の右手と垂れ拳を作す左手とは兩つながら思ふまゝに相張つて、その間に胸また廣く高く肋骨をも露はす。腰は高くやゝ右に捩ぢ、左右足相踏まへて重心はやゝ右足にかゝる。全體に於て前像よりも怒張する所やゝ少なく、裙も遙か靜かである。即前者は張り、後者はなほ藏するのである。金剛力士像に於てこの阿吽の對比は通則となつて居るのであるが、その形に關しては暫らくこれを措いて、これをその氣に就いて言へば、屢々前者まず人の心を脅かし、しかも同時にその好尙に入る。とは言へやがて人の心はこれを離れる。後者何時しかその心を奪ふ。奪はれた心は今度は中々にそれを離れない。暫し出でて前者に戻るが、又しては後者に宿る。今我等の前にある像に於ても亦この事實を見る。この心はやがて兩像を通じての忿怒の程度を思ひ、轉じて天平の世の忿怒像のそれを想ふ。想へばこの吽形のものさへもあまりにその忿怒の誇張されて居ることに氣付く。そのあまりに怒りあまりに行き詰められて、爲めに先を欠いて居ることを憂ひる。その部分的技巧に關してもやがて亦この言は當るであらう。

今兩者に現はれた技巧的方面を觀るのに、それは木彫法の絶頂のもの、その刀法は形くることに於てはどのやうに變化あるそれをも、現はすことに於てはその材の木質をよく筋肉に或は布に飜譯することを成し得るものとなつて居るのである。この技は天平の代塑像の忿怒形像に於て或る程度まで行はれてゐたのであつたが、木彫のそれはこれと全く別種のもの、しかもその結果に於て塑像のそれよりも遙か細密に又緊密に行はれたのである。そうしてその技は最もよく怒漲勇躍の金剛力士像に於て、ことに東大寺南大門のそれ等よりは本像のやうな小軀のものに於て自由に現はれ得るのであつて、その限りに於て本像は日本彫刻史上に唯一のものである。さうしてこの事實は觀者一度その細部に注意すれば自らこれを明らかに爲し得るであらう。

この二像傳へて定慶の作と言ふ。定慶は鎌倉時代の始本寺にその技を振つた者、その作品である確證をその體內銘に有つ文殊維摩帝釋天諸像また本寺に藏せられて居る。今これ等によつて彼の技の特徵を求めるのに、それは衣法に著しく現はれる。彼によつて作られる衣は、第一にそれが身體とは別のものであると言ふことをよく現はし得て居て、身體に密着することなく、それはよほど空隙を有つて弛み纏はるのである。さうしてこれは屢々並行様の衣皺によつてやゝ單調に整理せられる。又第二にその袖や裾はことにその著しいものであつて、恰かもそれは風を孕むかのやうに中に空洞を作り、その袖であり裾であることをいかにも誇張的に現はして居る。今こゝから目を轉じて本二力士像を見るのに、そこには身體と衣との區別は明らかに現はれて居るが、その衣の造形のみに於てはよほど彼とは異つた所を有つて居る。そこにはそれが風に靡く趣はあり乍ら、風を孕む形を作らない。又それは並行的の衣皺によつて單調に整理

今その兩像を見るのに、一體は開口瞋眦、やゝ伏視して右手を垂れ張つて掌を外に向け開き、左手は屈臂後に張り揚げて拳を作す。腰を左に捩ぢ足を右に張り左足に重心を置く。衣は裾高く右に飜り靡く。一體は同じく瞋眦の様ではあるが、口は閉ぢて左方やゝ遠きを瞰む。屈臂の右手と垂れ拳を作す左手とは兩つながら思ふまゝに相張つて、その間に胸また廣く高く肋骨をも露はす。腰は高くやゝ右に捩ぢ、左右足相踏まへて重心はやゝ右足にかゝる。全體に於て前像よりも怒張する所やゝ少なく、裙も遙か靜かである。即前者は張り、後者はなほ藏するのである。金剛力士像に於てこの阿吽の對比は通則となつて居るのであるが、その形に關しては暫らくこれを措いて、これをその氣に就いて言へば、屢々前者まず人の心を脅かし、しかも同時にその好尙に入る。とは言へやがて人の心はこれを離れる。後者何時しかその心を奪ふ。奪はれた心は今度は中々にそれを離れない。暫し出でて前者に戻るが、又しては後者に宿る。今我等の前にある像に於ても亦この事實を見る。この心はやがて兩像を通じての忿怒の程度を思ひ、轉じて天平の世の忿怒像のそれを想ふ。想へばこの吽形のものさへもあまりにその忿怒の誇張されて居ることに氣付く。そのあまりに怒りあまりに行き詰められて、爲めに先を欠いて居ることを憂ひる。その部分的技巧に關してもやがて亦この言は當るであらう。

今兩者に現はれた技巧的方面を觀るのに、それは木彫法の絶頂のもの、その刀法は形くることに於てはどのやうに變化あるそれをも、現はすことに於てはその材の木質をよく筋肉に或は布に飜譯することを成し得るものとなつて居るのである。この技は天平の代塑像の忿怒形像に於て或る程度まで行はれてゐたのであつたが、木彫のそれはこれと全く別種のもの、しかもその結果に於て塑像のそれよりも遙か細密に又緊密に行はれたのである。そうしてその技は最もよく怒漲勇躍の金剛力士像に於て、ことに東大寺南大門のそれ等よりは本像のやうな小軀のものに於て自由に現はれ得るのであつて、その限りに於て本像は日本彫刻史上に唯一のものである。さうしてこの事實は觀者一度その細部に注意すれば自らこれを明らかに爲し得るであらう。

この二像傳へて定慶の作と言ふ。定慶は鎌倉時代の始本寺にその技を振つた者、その作品である確證をその體內銘に有つ文殊維摩帝釋天諸像また本寺に藏せられて居る。今これ等によつて彼の技の特徵を求めるのに、それは衣法に著しく現はれる。彼によつて作られる衣は、第一にそれが身體とは別のものであると言ふことをよく現はし得て居て、身體に密着することなく、それはよほど空隙を有つて弛み纏はるのである。さうしてこれは屢々並行様の衣皺によつてやゝ單調に整理せられる。又第二にその袖や裾はことにその著しいものであつて、恰かもそれは風を孕むかのやうに中に空洞を作り、その袖であり裾であることをいかにも誇張的に現はして居る。今こゝから目を轉じて本二力士像を見るのに、そこには身體と衣との區別は明らかに現はれて居るが、その衣の造形のみに於てはよほど彼とは異つた所を有つて居る。そこにはそれが風に靡く趣はあり乍ら、風を孕む形を作らない。又それは並行的の衣皺によつて單調に整理

六

今その兩像を見るのに、一體は開口瞋眦、やゝ伏視して右手を垂れ張つて掌を外に向け開き、左手は屈臂後に張り揚げて拳を作す。腰を左に捩ぢ足を右に張り左足に重心を置く。衣は裾高く右に飜り靡く。一體は同じく瞋眦の様ではあるが、口は閉ぢて左方やゝ遠きを瞰む。屈臂の右手と垂れ拳を作す左手とは兩つながら思ふまゝに相張つて、その間に胸また廣く高く肋骨をも露はす。腰は高くやゝ右に捩ぢ、左右足相踏まへて重心はやゝ右足にかゝる。全體に於て前像よりも怒張する所やゝ少なく、裙も遙か靜かである。即前者は張り、後者はなほ藏するのである。金剛力士像に於てこの阿吽の對比は通則となつて居るのであるが、その形に關しては暫らくこれを措いて、これをその氣に就いて言へば、屢々前者まず人の心を脅かし、しかも同時にその好尙に入る。とは言へやがて人の心はこれを離れる。後者何時しかその心を奪ふ。奪はれた心は今度は中々にそれを離れない。暫し出でて前者に戻るが、又しては後者に宿る。今我等の前にある像に於ても亦この事實を見る。この心はやがて兩像を通じての忿怒の程度を思ひ、轉じて天平の世の忿怒像のそれを想ふ。想へばこの吽形のものさへもあまりにその忿怒の誇張されて居ることに氣付く。そのあまりに怒りあまりに行き詰められて、爲めに先を欠いて居ることを憂ひる。その部分的技巧に關してもやがて亦この言は當るであらう。

今兩者に現はれた技巧的方面を觀るのに、それは木彫法の絶頂のもの、その刀法は形くることに於てはどのやうに變化あるそれをも、現はすことに於てはその材の木質をよく筋肉に或は布に飜譯することを成し得るものとなつて居るのである。この技は天平の代塑像の忿怒形像に於て或る程度まで行はれてゐたのであつたが、木彫のそれはこれと全く別種のもの、しかもその結果に於て塑像のそれよりも遙か細密に又緊密に行はれたのである。そうしてその技は最もよく怒漲勇躍の金剛力士像に於て、ことに東大寺南大門のそれ等よりは本像のやうな小軀のものに於て自由に現はれ得るのであつて、その限りに於て本像は日本彫刻史上に唯一のものである。さうしてこの事實は觀者一度その細部に注意すれば自らこれを明らかに爲し得るであらう。

この二像傳へて定慶の作と言ふ。定慶は鎌倉時代の始本寺にその技を振つた者、その作品である確證をその體內銘に有つ文殊維摩帝釋天諸像また本寺に藏せられて居る。今これ等によつて彼の技の特徵を求めるのに、それは衣法に著しく現はれる。彼によつて作られる衣は、第一にそれが身體とは別のものであると言ふことをよく現はし得て居て、身體に密着することなく、それはよほど空隙を有つて弛み纏はるのである。さうしてこれは屢々並行様の衣皺によつてやゝ單調に整理せられる。又第二にその袖や裾はことにその著しいものであつて、恰かもそれは風を孕むかのやうに中に空洞を作り、その袖であり裾であることをいかにも誇張的に現はして居る。今こゝから目を轉じて本二力士像を見るのに、そこには身體と衣との區別は明らかに現はれて居るが、その衣の造形のみに於てはよほど彼とは異つた所を有つて居る。そこにはそれが風に靡く趣はあり乍ら、風を孕む形を作らない。又それは並行的の衣皺によつて單調に整理

六

せられるやうなことはなく、反つてそこには一つとして並行しない極めて變化多い曲線が縱横に走る。たとへ前三像は靜止の像、この力士像は運動を現はすものとしてその間に大きな相違はあるとしても、その間に現はれる刀法は本像のものが餘程よく鋭く磨かれたものである。更に言へば本像の衣は又別の特徴を有つ。即ちそれは三つの衣皺、或は一つの衣皺と二つの衣縁とを三叉する所に現はれる恰かも抓み揭げられたかのやうな一つの隆起であつて、これは確かにこの作者の作癖であり、それは前述定慶の三作には現はれるべくして見られないものである。說者はこれ等の觀察によつてやゝ斯界に認められて居るこの像を定慶とする說に遽かに同じ得ないものである。それならばそれは孰れの作者に歸すべきか。それはなほ問題として殘さうと思ふ。

第一四—第一七 西金堂木造天燈鬼龍燈鬼立像

右斜面、左斜面、正面、背面

天燈鬼 全長二尺四寸四分五厘 燈籠 高一尺四寸
龍燈鬼 全長二尺五寸三分 燈籠 高一尺四寸

もと西金堂に安置してあつた天燈鬼龍燈鬼像は佛師康辨の作である。彼は運慶の第三子、七條佛所第十代、法眼にまで敍せられたと言ふ。兩鬼像は興福寺雜錄に載せる所によると、その體內に「願主大法師聖勝生年五十一 建和三年乙亥卯月二十六日 綿百量 聖勝(花押) 法橋康辨(花押)」の書付が有るもので、彼の製作として確證ある唯一のものである。

二體ともに木造彩色像、眼には玉を嵌める。彩色は今僅かに凹處に胡粉地を殘すのみである。一鬼は頭上に六角燈籠を載せ眉を立て口を開き脣を反らして上を仰ぐ。腕組をしてその右の掌に身體に絡まる龍の尾を摑む。肩に布を纏ひ腰に褌を帶く外裸體である。兩足等しく左右に相踏まへて重心を直下に落とす。一體は燈籠をその左肩と左手とで荷ひ捧げる。その燈籠を避けて右に傾ぐ頭の上には角を生やし口を開き斜上を視る。燈籠の重みは右肩をして低く、右手をして外に張り拳を作らす。更にそれは直下、右足を外に張る援けによつて左足よくこれを堪へ受ける。身には肩と腰とに布を纏ふ。さうして兩鬼ともに岩座に乘る。燈籠は二つ乍ら後補のもの、龍燈鬼のものはことに新しく、享保二年本堂炎上の時これを取出し銘記を讀んだ事があるから、憶ふのにこの時の補か。又天燈鬼の岩座の後方部も後補のものである。

此二像を造立するのにあたつて作者の最も注意したことの主な一つは、どの樣にして燈籠を安定に保ち而も重々しく感じさせようかと言ふことであつて、作者は此爲めに先づ二鬼の體をその燈籠に比して少さな者として造り出し、各鬼の身はこれを又如何にも太く短かい者とした。なほその細部に就いて言へば、頸も四肢も身體に連れて太く短かく、手先足先はその四肢に、岩座は體軀に比して中々に大きいものとして作者は宜にもその表現を求めるのであつた。さうしてこれに承受の形に關する自然さが與へられて其效はよく奏せられたのである。なほ一つ言へば、この兩鬼の顏を主としその身體の態度やその裝に現はされた表情は作者のこの意圖をして成果あらしめるのに大きな效のある者であつて、即ち兩鬼はその如何にも人を嘲弄したやうな又諧謔的な表情によつて、その頭に又肩に載せる燈籠は如何にも重いが左程のことはないといふやうな心持を示して、

せられるやうなことはなく、反つてそこには一つとして並行しない極めて變化多い曲線が縱横に走る。たとへ前三像は靜止の像、この力士像は運動を現はすものとしてその間に大きな相違はあるとしても、その間に現はれる刀法は本像のものが餘程よく鋭く磨かれたものである。更に言へば本像の衣は又別の特徴を有つ。即ちそれは三つの衣皺、或は一つの衣皺と二つの衣縁とを三叉する所に現はれる恰かも抓み揭げられたかのやうな一つの隆起であつて、これは確かにこの作者の作癖であり、それは前述定慶の三作には現はれるべくして見られないものである。說者はこれ等の觀察によつてやゝ斯界に認められて居るこの像を定慶とする說に遽かに同じ得ないものである。それならばそれは孰れの作者に歸すべきか。それはなほ問題として殘さうと思ふ。

第一四—第一七 西金堂木造天燈鬼龍燈鬼立像

右斜面、左斜面、正面、背面

天燈鬼 全長二尺四寸四分五厘 燈籠 高一尺四寸
龍燈鬼 全長二尺五寸三分 燈籠 高一尺四寸

もと西金堂に安置してあつた天燈鬼龍燈鬼像は佛師康辨の作である。彼は運慶の第三子、七條佛所第十代、法眼にまで敍せられたと言ふ。兩鬼像は興福寺雜錄に載せる所によると、その體內に「願主大法師聖勝生年五十一 建和三年乙亥卯月二十六日 綿百量 聖勝(花押) 法橋康辨(花押)」の書付が有るもので、彼の製作として確證ある唯一のものである。

二體ともに木造彩色像、眼には玉を嵌める。彩色は今僅かに凹處に胡粉地を殘すのみである。一鬼は頭上に六角燈籠を載せ眉を立て口を開き脣を反らして上を仰ぐ。腕組をしてその右の掌に身體に絡まる龍の尾を摑む。肩に布を纏ひ腰に褌を帶く外裸體である。兩足等しく左右に相踏まへて重心を直下に落とす。一體は燈籠をその左肩と左手とで荷ひ捧げる。その燈籠を避けて右に傾ぐ頭の上には角を生やし口を開き斜上を視る。燈籠の重みは右肩をして低く、右手をして外に張り拳を作らす。更にそれは直下、右足を外に張る援けによつて左足よくこれを堪へ受ける。身には肩と腰とに布を纏ふ。さうして兩鬼ともに岩座に乘る。燈籠は二つ乍ら後補のもの、龍燈鬼のものはことに新しく、享保二年本堂炎上の時これを取出し銘記を讀んだ事があるから、憶ふのにこの時の補か。又天燈鬼の岩座の後方部も後補のものである。

此二像を造立するのにあたつて作者の最も注意したことの主な一つは、どの樣にして燈籠を安定に保ち而も重々しく感じさせようかと言ふことであつて、作者は此爲めに先づ二鬼の體をその燈籠に比して少さな者として造り出し、各鬼の身はこれを又如何にも太く短かい者とした。なほその細部に就いて言へば、頸も四肢も身體に連れて太く短かく、手先足先はその四肢に、岩座は體軀に比して中々に大きいものとして作者は宜にもその表現を求めるのであつた。さうしてこれに承受の形に關する自然さが與へられて其效はよく奏せられたのである。なほ一つ言へば、この兩鬼の顏を主としその身體の態度やその裝に現はされた表情は作者のこの意圖をして成果あらしめるのに大きな效のある者であつて、即ち兩鬼はその如何にも人を嘲弄したやうな又諧謔的な表情によつて、その頭に又肩に載せる燈籠は如何にも重いが左程のことはないといふやうな心持を示して、

七

せられるやうなことはなく、反つてそこには一つとして並行しない極めて變化多い曲線が縱横に走る。たとへ前三像は靜止の像、この力士像は運動を現はすものとしてその間に大きな相違はあるとしても、その間に現はれる刀法は本像のものが餘程よく鋭く磨かれたものである。更に言へば本像の衣は又別の特徴を有つ。即ちそれは三つの衣皺、或は一つの衣皺と二つの衣縁とを三叉する所に現はれる恰かも抓み揭げられたかのやうな一つの隆起であつて、これは確かにこの作者の作癖であり、それは前述定慶の三作には現はれるべくして見られないものである。說者はこれ等の觀察によつてやゝ斯界に認められて居るこの像を定慶とする說に遽かに同じ得ないものである。それならばそれは孰れの作者に歸すべきか。それはなほ問題として殘さうと思ふ。

第一四—第一七 西金堂木造天燈鬼龍燈鬼立像

右斜面、左斜面、正面、背面

天燈鬼 全長二尺四寸四分五厘 燈籠 高一尺四寸
龍燈鬼 全長二尺五寸三分 燈籠 高一尺四寸

もと西金堂に安置してあつた天燈鬼龍燈鬼像は佛師康辨の作である。彼は運慶の第三子、七條佛所第十代、法眼にまで敍せられたと言ふ。兩鬼像は興福寺雜錄に載せる所によると、その體內に「願主大法師聖勝生年五十一 建和三年乙亥卯月二十六日 綿百量 聖勝(花押) 法橋康辨(花押)」の書付が有るもので、彼の製作として確證ある唯一のものである。

二體ともに木造彩色像、眼には玉を嵌める。彩色は今僅かに凹處に胡粉地を殘すのみである。一鬼は頭上に六角燈籠を載せ眉を立て口を開き脣を反らして上を仰ぐ。腕組をしてその右の掌に身體に絡まる龍の尾を摑む。肩に布を纏ひ腰に褌を帶く外裸體である。兩足等しく左右に相踏まへて重心を直下に落とす。一體は燈籠をその左肩と左手とで荷ひ捧げる。その燈籠を避けて右に傾ぐ頭の上には角を生やし口を開き斜上を視る。燈籠の重みは右肩をして低く、右手をして外に張り拳を作らす。更にそれは直下、右足を外に張る援けによつて左足よくこれを堪へ受ける。身には肩と腰とに布を纏ふ。さうして兩鬼ともに岩座に乘る。燈籠は二つ乍ら後補のもの、龍燈鬼のものはことに新しく、享保二年本堂炎上の時これを取出し銘記を讀んだ事があるから、憶ふのにこの時の補か。又天燈鬼の岩座の後方部も後補のものである。

此二像を造立するのにあたつて作者の最も注意したことの主な一つは、どの樣にして燈籠を安定に保ち而も重々しく感じさせようかと言ふことであつて、作者は此爲めに先づ二鬼の體をその燈籠に比して少さな者として造り出し、各鬼の身はこれを又如何にも太く短かい者とした。なほその細部に就いて言へば、頸も四肢も身體に連れて太く短かく、手先足先はその四肢に、岩座は體軀に比して中々に大きいものとして作者は宜にもその表現を求めるのであつた。さうしてこれに承受の形に關する自然さが與へられて其效はよく奏せられたのである。なほ一つ言へば、この兩鬼の顏を主としその身體の態度やその裝に現はされた表情は作者のこの意圖をして成果あらしめるのに大きな效のある者であつて、即ち兩鬼はその如何にも人を嘲弄したやうな又諧謔的な表情によつて、その頭に又肩に載せる燈籠は如何にも重いが左程のことはないといふやうな心持を示して、

七

よく燈籠を重くまた輕からしめて居るのである。人は本像を諧謔的の一作と見ることに直ちに同意するであらう。しかもこの表情は作者に於てはこのやうな意圖に供せられて居ることはなほ思ふべきことである。又二像の刀法やゝ粗、これを部分的に見ればその難ずべき所の多くを見るが、その全體を纏めることに於ては反つて細心の巧あることを思へば、二像は鎌倉時代の彫刻の一欠陷を滿たし得て居る作である。

第一八、第一九　木造佛頭、同佛手

佛頭　頂上より腮まで　三尺四寸四分

本寺の寶藏の內今木造佛頭一箇、同佛手二箇を遺こす。其の何れの堂の何れの像に屬する者であるかを明らかにしない。佛頭はこれを木寄せにより又木眼に作る。上に漆を塗るが金箔は全く剝落してその跡もない。その螺髮目鼻あたりの形式、定朝系のものとはやゝ相違し、木眼ではあるが寧ろその刀法とともに鎌倉初期のものに類する。眉極めて長く又明らかに、その弧線のやゝ急であるのをその特點として居る。さうしてこれ等總ての造形よく整つてその一秀作たるを證す。佛手亦これに適ふ。佛體その舊觀なきを悲しむけれど、破損の個處よくその製作の術を露はし語るは研究者望外の幸である。

第二〇　木造天人像

寶藏又多くの木造天人像を遺こす。今こゝに載せるものはその一部である。その製作は平安朝後期か。蓮臺により或は直ちに飛雲中に乘り四肢姿態その妙を盡くす。多く兩手を欠いて居てその行相を明らかにしないが、思ふに鳳凰堂壁間のそれの樣な雲中供養の天人であつて、各その手に法器樂器等を持つて居たのであらう。その何れの堂に屬して居たものであるか、又それが鳳凰堂のものゝやうに壁間に附いて居たものか又光背中のものであるか明らかでないが、たゞ思ふのに、その姿態や蓮臺や雲の樣子から推して光背佛としてはやゝ穩當を欠くやうである。或は諸寺緣起集中の興福寺緣起が中金堂の彌勒淨土群像に附屬するものとして舉げるところの天人像十六軀「四各三尺六寸。二各一尺九寸五分。四各一尺九寸。一一尺七寸五分。一三尺一寸五分。一二尺一寸。一二尺。一三尺二寸。一一尺九寸」と深い關係を有つものではあるまいか。

興福寺北圓堂

興福寺北圓堂細部（其一）

興福寺北圓堂細部（其二）

興福寺北圓堂内部

興福寺北圓堂本尊彌勒菩薩像（其一）

興福寺北圓堂本尊彌勒菩薩像（其二）

興福寺西金堂金剛力士像（其一）

興福寺西金堂金剛力士像（其二）

興福寺西金堂金剛力士像（其三）

興福寺西金堂金剛力士像（其四）

興福寺西金堂金剛力士像（其五）

興福寺西金堂金剛力士像（其六）

興福寺西金堂金剛力士像（其七）

興福寺西金堂金剛力士像（其七）

興福寺西金堂金剛力士像（其七）

興福寺天燈鬼龍燈鬼像（其一）

興福寺天燈鬼龍燈鬼像（其二）

興福寺天燈鬼龍燈鬼像（其三）

興福寺天燈鬼龍燈鬼像（其四）

興福寺佛頭

興福寺佛手

興福寺天人像